The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	ジョージ・エリオットのヘロイン達 : ロモラ, ドロシア, グエンドレン (II)
Author(s)	木村, 成子
Citation	待兼山論叢. 文学篇. 1975, 9, p. 5-22
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/47745
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

ジョージ・エリオットのヘロイン達：ロモラ，ドロシア，グェンドレン(Ⅱ)

木　村　成　子

I

「きわめて広い意味に於て，人は同じ本しか書かない」と，Françoise Saganは作家の立場から主張している。彼女は言う。「同一の人物を本から本へと連れていくのです。同じ思想を書き続けていくのです。ただ見る角度，方法，光のあて方が違います。」[1] Sagan のこの言葉は，George Eliotの場合，殊にあてはまるように思われる。即ち，習作である*Scenes of Clerical Life* から最後の*Daniel Deronda*に至る主要作品に於て彼女が一貫して追求したのは主人公のmoral evolutionであり，彼等の無知から精神成長へという発達がいつも描かれてきた。このように彼女の作品は，その主題が，「人生の門出に立つ若い主人公が，種々の試練による精神成長を経て自己確立に至る」[2]という精神発達過程を追う点で，*Bildungsroman*に属するものである。こうして主題として主人公の*Bildung*を扱うというきわめて広い意味に於て，彼女は同種の作品を書き続けたといえる。

殊に後期の三作品，*Romola, Middlemarch, Daniel Deronda* を*heroine*中心に考えた場合，主題のみならず，*Bildung*の主体となるheroine像，そして彼女をとり巻く状況設定に於て，顕著な同一表現が繰返し流れているという感が強い。ところで，この同一表現に関しては，Osaka Literary Review NO. XIV にて考察しているので，当論では割愛したい。要約すると，美しく利発で大胆なheroine達がaspiration追求の末，誤った結婚を

選択し破局を迎えるが，不幸な結婚という試練を通して自己を超えた広大な視野に目覚める過程が常に主題とされている。そして彼女達が開眼し，或いは開眼しようとする広大な視野が，いづれの場合も，George Eliotの信念であるReligion of Humanityと強く結びついていることも見逃せない。又，heroineの*Bildung*に大きく寄与する人物群とその役割関係——heroineの*Bildung*の負の形成要素であるheroineの夫とその mistress，そしてmentorとしてheroineを導く正の形成要素たるもう一人の男性——に於ても同じpatternが繰返されている。

このように三作は，数々の点に於てかなり顕著な類似関係にあるが，にもかかわらず，紛れもなく全く異なった作品として評価を受けてきた。George Eliotがある意味で彼女の分身ともいえるtypeのheroine の同じような生涯を繰返し追求したのは，何かやむにやまれぬ切実な気持が働いてのことに違いないが，単にobsessionにとらわれてしまったのではなく，それを不断に展開し発展させていったことが，三作を比較すると感じられる。ここで考察する三作は，きわめて顕著な類似関係にある故に，差はそれだけ明瞭に浮び上ってくる。重要なことは同一表現に対する作者のapproachの差，つまり「見る角度，方法，光のあて方」の違いであり，そこから各作品の特殊性が生れてくる。ところで文学作品とは作者の精神生活の足跡でもあり証言でもあろう。全てのものを発展，進化のうちにとらえるDarwinismを信ずる彼女自身，作家として思想家として常に展開し続けたと思われる。三作を比較検討することによって *Romola* から *Daniel Deronda*への14年間にわたるGeorge Eliotの微妙な変化を追求することが本論の目的である。

II

三作を比較した場合，殊に明瞭に感じられる差として，heroine像の変化と，夫々の作品の背後にある思想の変化が挙げられるだろう。ここでは，

heroineを取り巻く人物関係etc.に於て三作の中でも特に類似関係が著しいRomolaとGwendolen像の差を見ることによって，観念の絶対を確信する理想主義から厳しい現実の直視へと移るGeorge Eliotの視点の変化を考察したい。

George Eliotのcharacterizationに於て，大きな弱点として挙げられるのはidealizationである。特にcharacterのmoral idealizationすなわちthe depiction of characters not as they are but as they ought to beが頻繁であることを，W. J. Harveyは指摘している。(3) Danielを始め多くのcharacterがこの理想化のため魅力的でありながらも現実離れした迫真性のないcharacterに終ってしまっている。Romolaもその例にもれない。

例えばRomolaのidealizationは，彼女と対照的な人物，Tessaと比較した場合，瞭然である。Romolaが過度に理想化されているように，Tessaは過度に下劣化されている。Tessaにはlittle goose, brute-like symplicityというような動物的imageが多い。彼女がsmall wild flowerであるならば，Romolaはwhite lily, topmost appleとして表現される。以下は窮地に立つTessaをRomolaが助ける場面だが，これは二人の最初の出会いでもある。

> . . . her pouting lips were quivering, the tears rushed to her eyes, and a great drop fell. . . . Suddenly a gentle hand was laid on her arms, and a soft, wonderful voice, as if the Holy Madonna were speaking, said, "Do not be afraid; no one shall harm you."
>
> Tessa looked up and saw a lady in black, with a young heavenly face and loving hazel eyes. She had never seen any one like this lady before, and under other circumstances might have had awe-struck thoughts about her; but now everything else was overcome by the sense that loving protection was near her.(4)

TessaにとってRomolaはreligious aweに包まれたこの世のものならぬ聖女である。このようにRomolaと Tessa は spiritual な天上的女性とsensualな地上的女性という対比のもとでTitoを取り巻く。そして真相が判明し互いの立場を知った後も，Romola が Tessa をいたわり Tessaが Romolaを敬慕する二人の親愛関係は冷却するどころか，ますます強く結ばれ合う。最終的にはTitoの死後，RomolaはTessaと子供達を引取り，彼等からMama Romolaと慕われて余生を平和に暮している。

idealizationが更に強められるのは，非常に symbolic な Romola の精神的再生を描く "Drifting Away"（61章）以降である。'. . . the "Drifting Away" and the village with the plague belonged to my earliest vision of the story and were by deliberate forecast adopted as romantic and symbolical elements.'(5)と，作者自身述べているように，以下はromance的色彩が一きわ濃くなる。夫にもSavonarolaにも失望した彼女は，地中海に小舟を浮かべ運命に身を任せ漂流する。全てを捨てて小舟に運命を託したのは，文字どおり self-renunciation を symbolizeするものであり，その結果彼女が行き着いた精神的開眼を描く68章は "Romola's Waking" と題されている。そして辿り着いた村で，自己を捨て疫病に侵された病人を救ううち，真の精神発展を遂げSavonarola，更にTitoにすら理解と同情をもち得るようになる。彼女の献身的な看護で絶滅を救われた村では，"the blessed lady who came over the sea and had done beautiful loving deeds." として，後々迄彼女に関するlegendが伝えられ伝説的人物に迄昇華される。つまりここに至って彼女は既にromance的聖女と化している。このようにRomola は George Eliot のかくありたい理想の姿をdirectに具現した観念の創造物であり，Romolaの世界は道徳律で輝く異常な明るさをもつものであった。

romanceの聖女的Romolaに比べてGwendolenははるかに現世的contextの中に生きている。例えばGwendolenは蛇のimageをもつ。冒頭第1章，

賭博場でのpartyにsea-greenの衣装をまとい銀の装身具を身につけた彼女を人々は次のように言う。

> "A striking girl — that Miss Harleth — unlike others."
>
> "Yes; she has got herself up as a sort of serpent now, all green and silver, and winds her neck about a little more than usual."
>
> "She is certainly very graceful. But she wants a tinge of colour in her cheeks: it is a sort of Lamia beauty she has."(6)

この蛇のimage，或いは上半身人体で下半身が蛇である女の怪物Lamiaのimageは，Romolaにはなかったevilの要素を暗示しているようである。事実，教養と才知，美貌で人々の称賛を一身に集める彼女であったが，人々は賛美のうちにも，彼女に潜む悪魔性——an undefinable stinging quality of demon ancestry——に戸惑を禁じ得ない。

*Daniel Deronda*はGeorge Eliotの他の作品同様，double plotsより成るが，Gwendolen plotに於て追求する人間性の暗黒な面は凄まじい。楽観的なGeorge Eliotの哲学はここでは通用せず，暗い現実に圧倒されているようである。J. Thaleは*Daniel Deronda*には，他で見られなかった a radically new tone——a new and direct confrontation of certain kinds of evil, of perversity, hitherto unacknowledged —(7) が存在することを認めている。

Gwendolenにまつわる暗黒性は，heroineとmistressとの関係の様相に於て，Romolaの場合と比較してみても明瞭に感じられる。RomolaとTessaが両極端の対照的人物であり，moral fable的contextのもとで和をもって生きたに反し，GwendolenとMrs. Glasherは非常に似たtypeの女性であり，彼女達の相剋は戦慄を与えずにおかない。Gwendolenのimageが蛇であるように，Mrs. Glasherに関しても蛇のimageが強い。Gwendolenと結婚するため，一度与えたdiamondを取り戻しに来たGrandcourt

に対するMrs. Glasherのうっ積した憎悪は終始venom（毒蛇の液）で表わされる。そして復讐のため結婚式当日 Gwendolenに送るdiamondに添えた呪いの手紙——以後Gwendolenをさいなみ続ける彼女の手紙はadderと表現されている。このようなimageの類似は二人が同種の人間であることを意味しているようである。即ち，adorationが何よりも好きな noted beauty， vivaciousな情熱家というMrs. Glasherの特質はそのままそっくりGwendolenの人となりに該当するし，夫と子供を捨ててGrandcourtのもとへ走ったMrs. Glasherのegotismは，Mrs. Glasherとの約束を破りGrandcourtと結婚したGwendolenにも見られる。彼女達は偶然のようにたった二度出会っただけだが，二人の相剋は最後迄続く陰惨なものとなっている。

19世紀に於て自然科学はめざましい発展を遂げた。同時に全ての現象を法則のもとで統一しようとする合理的な考え方が生れる。進歩的であったGeorge Eliotも近代科学への信頼は強く，自然界の事象一般のみならず，人間にも一定のLawが支配するという実証主義に深く共鳴している。豊田実氏はGeorge EliotをHardyと比較し，どちらもthe Law of Retributionの思想をもってはいたが前者がmoralistとしての立場からこれを肯定しそのLawに於ける人間の力を強調したのに対し，後者はfatalistの立場からLawに於ける人間の無力さを認め，不当なものとして人間への同情をもつという違いを指摘している。(8)

moral choiceを正当に行い自己の行為を道徳律で判断したRomolaは試練を受けたとはいえ，最終的には光に満ちた世界に到達出来た。つまりRomolaは道徳律を守るという意志によって，あらゆる苦難を克服し支配出来る絶大の力を持っている。このようにRomolaの世界は道徳律万能の世界といってもよく，道徳律さえ守れば人間は運命や偶然に左右されぬ力強い存在でいることが出来る。これに比べてGwendolen の存在の何と弱小ではかないことだろう！前半 “I must decide for myself. My life

is my own affair." と言って潑剌たるspiritと行動力で読者を魅了した彼女も，後半，人生という仮借ない大きなものの中でもまれる時，木の葉のように力無い存在である。Mrs. Glasherの出現による結婚問題のこじれに始まり，一家を襲った突然の破産，それに伴う屈辱的な現実，Klesmerによる彼女の才能への手厳しい批判と，全てが如何ともし難い圧力で彼女の夢と可能性への自信を消していく。しかも結婚後，夫が押しつけるhelplessness, despair, humiliationから免れることは出来ない。たとえevilの要素をもってはいても，もっと根深いroot of conscienceをもつGwendolenの悲劇は善意へと目覚める意志を実現出来ない悲劇であり，それを阻むのは，環境であり運命であり混沌たる未知の力で彼女を翻弄する宇宙である。

> The universe forcing itself with a slow, inexorable pressure into a narrow, complacent, and yet after all extremely sensitive mind, and making it ache with the pain of the process — that is Gwendolen's story. And it becomes completely characteristic in that her supreme perception of the fact that the world is whirring past her is in the disappointment not of a base but of an exalted passion. The very chance to embrace what the author is so fond of calling a 'larger life' seems refused to her. She is punished for being narrow, and she is not allowed a chance to expand.(9)

ところで聖女のようなRomolaに対して，罪に苦しむGwendolenをGeorge Eliotはどのように描いただろうか。moral choiceを二度とも誤った彼女に対して作者は極めて厳しく，外からは残忍冷酷な夫との生活，内では罪の意識という過酷な罰を課している。にもかかわらずGwendolenに対する作者の態度は，人間とはこのように誤ちを犯しがちな弱いものだという理解と同情の目をもって，寛大に罪を許そうとする態度である。例えば彼女のように何事にも卓越した存在で，'a princess in exile' の如く甘やかされた世間知らずの少女が，生意気さ，思い上りを抱くのはごく当

然だし，又，良心の呵責を感じつつも準男爵との結婚を望む気持は，地位によって人間を評価する俗物精神の中で育った者として自然のなりゆきであったことを，作者は人間性とはこういうものだという如く，あらゆる角度から追求する。そこにはRomolaに対するようなidealizationはないが，善も悪も備えた弱小な人間の実体としてのGwendolen への同情と理解がある。

> Great literature. . . is the Forgiveness of Sin, and when we find it becoming the Accusation of Sin, as in George Eliot, who plucks her Tito in pieces with as much assurance as if he had been clock-work, literature has begun to change to something else.(10)

W. B. Yeatsは上記のように*Romola*の欠陥を述べているが，Gwendolen plotにはそれが該当しないことは明らかであろう。

先にthe Law of Retributionに於けるGeorge EliotとHardy の違いを書いたが，Gwdndolen plotの場合,善へ向かおうとする意志を阻む運命の存在意義の大きさ，人間の無力さ，或いは作者自身のGwendolenへの同情という点で，ややHardy的な方向へ傾いてはいないだろうか。しかし，これはGeorge Eliotの思想態度がoptimismからHardyのような極端なpessimismへと変ったというのではなく，*Romola*の時のように全てを法則で割り切る実証主義的人間観から，因果論や法則で単純に律し切れない人間存在の複雑さへと作者の洞察が変化していることのように思われる。

Ⅲ

三つの*Bildung*は，無知から結婚の試練を経て開眼するという同じ過程をたどるが，最後に到達した夫々の境地はかなり違ったものとなっている。三人は例外なく*Bildung*を完成させ「自己」確立に於ては成功したと言える。しかし*Bildung*の主体として主観的な世界に於ては勝利を得ても，客観的な意味での勝利者として他者や社会から受け入れられただろうか。三人の*Bildung*の最も明瞭な差は，*Bildung*到達点に於ける自と他との関係の様

相の違いであろう。この変化はGeorge Eliotのみならず，1860年代に於ける*Bildungsroman*の大きな特質と言われている。[11] 三つの*Bildung*を考察し特にその到達点での自と他の融合から疎隔に至る変化を見ることによって，George Eliotの思想に生じた漸次的変化をたどりたい。

Romolaの*Bildung*にとってTitoは切り離すことの出来ない重要性をもつ。彼は単にRomolaの*Bildung*に重要な働きを為す一形成要素としての存在のみでなく，小説構成上，彼女の成長方向を明確に位置づける対照的生き方をする対照的人物である。"What, looked at closely, was the end of all life, but to extract the utmost sum of pleasure? "と言って，pleasure-and-pain こそ万事を処理する基準と考えるギリシア人のTitoと，克己，献身，品行と倫理を至上とするRomolaは，ギリシア的なHedonismに住む人間とHebraism的世界に住む人間との差をもつ。そして彼らの生き方も又対照的である。いわば同じ出発点からstart した二人が，moral choiceを正当に行なうか否かによって，Romolaは人格形成という正の*Bildung*を歩むとすれば，Titoは堕落という負の*Bildung*を，しかも同じ歩調で歩んでいるのだ。

Titoの行為の基準がegotistic な快楽主義であったに反し，Romola のそれはLove for Others というaltruismであった。彼女の*Bildung* はaltruismの対象への彼女の視点の発展である。少女時代に抱いた父への愛に代表される骨肉を対象とする視野の狭い愛から，Savonarola に導かれたFlorenceへの愛，そして最終的に人類への愛と，彼女のaltruismの対象は骨肉→community→人類一般というより広い視野へと発展している。彼女が常にaltruismの精神で行為を制御したに反し，Tito はmoral choiceの際必らずdutyよりも自己の快楽を選ぶことによって，Romolaの愛する対象をことごとく破滅させる。即ち，養父Baldassare, Romolaの父Bardo，godfatherのNeroを裏切り，骨肉の愛を破壊することから始まり，Florenceの政情をかき乱したまま逃亡し同胞をも陥し入れようと

する。このようにaltruismのbelieverとdestroyerとして対立する二人の結末はこれ又対極的で，Romolaがmadonnaとして内外共に勝者となり得たに反し，Titoは大悪人の刻印を押されNemesis の手によって水死させられるという敗北で終る。

彼等のmorality playのようなこのprocessにはthe Law of Retributionが数学的な計算と均衡をもって感じられ，観念の意図がdiagramのように表われすぎている。特に現実離れした“Drifting Away”や最後のoptimisticで勧善懲悪的な結末は，通常の生の枠をとび越えたもので，全的な世界ではなく生のごく一部のテーマのみを誇張し焦点を合わせたものであり，Jamesの言う「解放された経験」となっている。ここにはGeorge Eliotの偉大な小説家としての特質である実人生に立脚した個人の世界を扱うことはなく，倫理観念を実人生にはめこんでしまい，思想体系から世界を説明しようとする態度が強く見られる。その結果，現実の生を離れた願望実現の文学，つまりromanceとなってしまっている。

Dorotheaの*Bildung*はRomolaとは比較にならない程，深刻でrealなものである。それは単に舞台が15世紀 Florenceという romance 的世界から1830年代という現世に移ったためとだけはいい切れないものがある。Romolaが最終的には自己の理想の境地に至り真に幸福を得たのに反し，Dorotheaはaspirationを追求して遂に得られず挫折せざるを得なかった。*Bildung* の結果彼女が痛感したのは，他から受け入れられない孤独と，not a nice womanとしての刻印であった。DorotheaはRomolaにはなかった他との断絶という新たな不幸を開眼後も経験せねばならない。二人が同系列に並ぶ女性であり同じような*Bildung*を経過したのに，この結末の明暗の差は大きな意義をもつのではないだろうか。

Dorotheaと Casaubon の悲劇は理想と現実のgapから生じたものである。双方共egotismを内に秘めて自分に都合の良い理想像を相手に求めて結婚したものの，現実の相手は理想からほど遠い存在であった。ところが

夢が破れた後も，二人は相互の真の姿を理解しようとはせず自己の願望を押しつけ，その結果傷つき誤解と不信に悩む。しかしDorotheaは次第にegotismを乗り越え，夫に対して理解と慈愛を抱く程成長するが，Casaubonは彼女への疑惑を強め固く殻を閉ざし彼女を拒否する。更に彼女の善意を決定的に踏みにじったのは，“the property is all to go away from Dorothea if she marries Ladislaw.”という彼の遺書である。Dorotheaがそれを知ったのは，夫の死後も彼の希望通りに価値の全くない時代遅れの研究を受け継ぐべきか，或いは自分の願望にそって生きるかのchoiceを迫られ，道義上前者を選んだ直後であっただけに，彼女はあらためて断絶を痛感する。こうしてDorotheaが試練の後，自己を捨て他者に生きようと努めた挙句苦々しく悟ったのは，夫婦間に潜んでいた不信と疑惑であり，“What loneliness is more lonely than distrust?”という疎隔であった。

ところでDorotheaは後に無実の罪で窮地に立つLydgateの救済に善意を尽して運動するが，彼女の意図はMiddlemarchという強力な壁を前に人々を説得出来ず遂に挫折してしまう。結局Dorotheaを理解するのはLydgateのみであり，又Lydgateに同情し救いの手を差しのべたのがDorothea一人であったことは意義深い。何故なら，Lydgateの歩みはDorotheaのそれと同一テーマと言ってもよい程類似しており，二人は言わば同類相憐れむ形で互いの挫折を悲しむ友としての共感をもっているからだ。このようにDorotheaはaltruismに開眼し実行するが，二度とも他からは理解されず，個人と個人，個人と社会の疎隔を痛感せざるを得なかかった。

さてGeorge Eliotが大いに共鳴したComteの実証哲学に於ては，Love and SympathyこそReligion of Humanityの土台となるべきものであった。ところがDorotheaが経験する疎隔を見てもわかるように，Sympathyという他と心を交わし合うことは困難に，否，不可能になっている。Love for Othersの崇高な意志も自と他の断絶がある限り，結局は理解も成就も

されない。このように*Middlemarch*での作者の変化は，対他者観，対社会観にある。Dorotheaが試行錯誤の結果悟ったのは，他者の力，社会の力の強大さである。それは必らずしも善なるものではない。それどころか*Middlemarch*の場合，善意を破壊する悪といってもよい。例えばMiddlemarchにしみついた恐ろしいまでの無知と偏狭な自閉性。1830年当時，地方中都市として孤立したMiddlemarchの島国根性は徹底しており，他国者や自分達と異なる進歩的な生活態度をもつ人間には白眼視と不信しか抱けない。

「人類は総体であり，個人は一部分である。従って個人はあらゆる意味に於て全体である人類に服従すべきであり，己を殺して他に生きるのが我々の最上の道徳である」とするComte哲学に於ける他者或いは社会は過去のGodに匹敵する崇高な存在である。だがDorotheaにとって他者であるCasaubon，社会であるMiddlemarchは逆に善なる意志を踏みにじる強力な障害物となっている。C. Bedientは“the insignificance of the others”の強烈な表現が*Middlemarch*の特長であり，そこではGeorge Eliotのworld of beliefが崩壊していると指摘している。(12)

*Middlemarch*は副題の通り，諸々の市民の3年間にわたる生活を描いたものだが，Middlemarchは物語のbackgroundというより，それ自体がある不合理な力をもってcharacterを揺さぶる主役としての存在ではないだろうか。

> Many Theresas have been born who found for themselves no epic life wherein there was a constant unfolding of far-resonant action; perhaps only a life of mistakes, the offspring of a certain spritual grandeur ill-matched with the meanness of opportunity: perhaps a tragic failure which found no sacred poet and sank unwept into oblivion. With dim lights and tangled circumstances they tried to shape their thought and deed in noble agreement; but after all, to common eyes their struggles seemed mere inconsistency and form-

lessness; for these later-born Theresas were helped by no coherent social faith and order which could perform the function of knowledge for the ardently willing soul.[13)]

如何に崇高な理想や精神の持主といえども，現実の俗悪さの前では挫折せざるを得ないことが“Prelude”で述べられている。このepic lifeとは他者や社会への愛によって開かれる‘larger life’であるが，Romolaには理想の形で獲得されたepic lifeがDorotheaには最早手に入らぬものとなっている。これ迄のGeorge Eliotの世界は，全て法則で考察出来，法則を把握することで人間は全てを支配出来る力強さをもっていた。ところが，*Middlemarch*では作者の目は今迄の理論や道理では単純に通用しない現実の複雑な不合理性を見つめている。その意味で*Middlemarch* は従来の思想体系からはみ出したGeorge Eliotの現実洞察力が初めてとらえた人生の実体である。

*Middlemarch*ではGeorge Eliotの哲学に限界が見られるとは言え，なおDorotheaやLydgateには彼女の信念を明瞭に見ることが出来た。しかしGwendolen plotは前述のように作者が描いたことのなかった生の暗黒面が扱われていて，まさに別人の作のような観がある。heroineとして蛇のimageをもつtypeを選んだのも異例だし，“a consummate picture of English brutality refined and distilled”と評されるGrandcourtのような徹底した悪人像には，彼女のこれ迄の人間尊重の精神は見られない。Gwendolen同様，Grandcourtも又，lizard, alligator, boa-constrictorというより獰猛な爬虫類のimageをもつ。Gwendolen plotは底知れぬegoが渦巻く暗黒の世界だが，彼等のこういうimageはこの上なく暗い人間関係を暗示している。

“Marriage must be a relation either of sympathy or of conquest.”とTitoは言うが，その考え方からすると，Gwendolenと Grandcourtの結婚はその後者であり，彼等が強く求めたのは相手を徹底的に支

配することであった。「結婚しても自由でありたい。夫をleadしひざまづかせたい」とする彼女と，「自分を征服したいと思う女性を征服する」ことを目指す夫は，互いを自己の征服欲を満足させる相手として，つまり自己のegoismのreflectionとして見ている。このようにegoismから成立した結婚という点で，Dorotheaの結婚に類似するが，Dorotheaの場合は無知とはいえaltruismより生れたegoismであり，その意図には崇高な要素がある。しかしGwendolenの場合はGrandcourtに属するthe dignities, the luxuries, the power of doing a great deal of what she liked to do へのdesireから生れたegoismであるという点で，より醜悪なcaseとなっている。

結婚後，"I made my gain out of another's loss." と言って罪にめざめたGwendolenはmentorとしてDanielに救いを求めるが，彼の説得は，自己を離れて広く他者に目を向けるようにとRomolaを導いたSavonarolaの説得と全く同じである。

> "Look on other lives besides your own. See what their troubles are, and how they are borne. Try to care about something in this vast world besides the gratification of small selfish desires. Try to care for what is best in thought and action — something that is good apart from the accidents of your own lot." [14)]

しかし説得の内容は同じであっても，それへのheroineの対応のあり方には大きな差が見られる。Romolaがadviceを守り個人的な苦悩をFlorenceへの愛と奉仕に昇華して 'larger life' を開いたに対し，Gwendolenはadviceの貴さを真に認めてはいるものの，他者愛どころか逆に夫への憎悪と激しい復讐心というより狭く暗い悪しか見ることが出来ない。善へと導くa part of her conscienceであるDanielの力よりもdespairを押しつける夫の悪の力の方がはるかに強大なのだ。さらにGwendolen plotを陰惨にするのは，彼女自身の悪へ向わざるを得ない意志である。Romolaは

夫とのreal unionが不可能だと知ると，その絆を切る唯一のresource をFlorenceから地中海へ逃れるという消極的なflightに求めたが，Gwendolenには夫殺害というつきつめた積極的な悪しかなかった。

Gwendolenがmoral choiceを二度とも誤ったことも，他のheroineとは異なる大きな点である。第一はMrs. Glasherとの約束を破りGrandcourtの求婚を受けた時，第二は溺れて助けを求める夫にropeを渡さず傍観した時，彼女は内からの欲求に負け罪深い人間となっている。彼女の悲劇はより広きものに目ざめよと説得され，その重要性を痛感しつつもますます狭くならざるを得ない悲劇であり，そうさせるのが夫や運命に代表される外からの悪だけでなく，彼女自身の内部に潜むevilでもあるという点で，絶望的に暗い。三作共，苦悩を通して開眼するという主題をもつが，Gwendolen plotほどこの苦悩の過程にspotlightをあてられ重点を置かれたものはない。もちろんRomolaやDorotheaの道も険しかったが，苦悩の過程よりも開眼の瞬間の方がより印象的であるに反し，Gwendolenに於いては開眼ではなく前二者よりもずっと複雑な内的構造をもつ葛藤こそ作者が描こうと努めた対象のように思われる。

Gwendolenの開眼が他の場合のように，人類愛と直接に結びつかないのも一つの特長である。Danielの教えにもかかわらず狭さから脱け出せなかった彼女を開眼させたのは，結婚の試練ではなく，誰よりも必要とするDanielとの別離である。

> The world seemed getting larger round poor Gwendolen, and she more solitary and helpless in the midst. . . .
>
> . . . . . .
>
> But here had come a shock which went deeper then personal jealousy — something spiritual and vaguely tremendous that thrust her away, and yet quelled all anger into self-humiliation.[15]

ここで彼女は世界の広大さと自己の卑小を思い知る。これ迄"coachman"だと思っていた自分は客観的な光のもとで見れば"a rather ridiculous fifth wheel to the coach"[16]にすぎなかったという。shockingな開眼で

ある。しかし開眼に際して，他のheroineがBildung即Love for Othersという力強い生き方に進むことが出来たに対し，Gwendolenには巨大で不可解な生を前にした無力感しか与えられない。Romola，Dorotheaのstoryには明確に一個人のBildung＝人類愛という自的論的志向が感じられた。しかしGwendolen plotでは広漠な生の中でさまよいつつ種々の試練を通して次第に方向を目指していく一人の弱い人間の存在を描くことに重点が置かれている。

Ⅳ

RomolaとGwendolen像を比較すると，全てを実証主義的観念で統一する人間観から，そういう合理主義的法則で律し切れない複雑な現実の直視へと作者の視点が変化したことが見られた。又，Bildungの到達点を考察すると，実証主義精神が完全にその全面的勝利を得たのはRomolaのみであり，他の二者は挫折しているのがわかる。更にGeorge Eliotは最後の二作で，これ迄彼女の価値観から考えた場合sacredでなければならぬ人類社会の悪の部分をさらけ出し，その前で Humanism が踏みにじられるprocessを描いている。このようにGeorge Eliotの道徳律をdirectに具体化した *Romola* が実証主義宣揚の目的をもつ小説であったに対し，後者二作では目的意識が先立たず，それよりも生のもつ不可知性，不可測性の中で迷いつつもなお方向を見定めようとする人間を描くところに創作の焦点を置くように思われる。そこでは実人生の不気味な力が描かれ，実証主義という狭い価値観によって歪められない厳しい現実洞察が感じられる。

次に三作を通して感じられるもう一つの変化は，誤ちを厳しく裁くmoralistの立場から，誤ちを犯しがちな弱い人間へのLove and Pity を抱く作家としての変化であろう。*Romola*ではYeatsの指摘する通り，厳しい道徳観念で人をがんじがらめにし，moral choiceの罪を問いつづけて

いる。そのためRomolaは気高いが血の通わぬ聖女として彼女の生き方は説得力のないものとなっている。ところで彼女が信条とした Love for Othersの根本精神は本来, *Romola*で支配的なthe Law of Retributionの徒に人を罰するような狭量なものでなく，人間の誤りをも許す Love and Sympathyにこそ存在した筈である。George Eliot自身，何であれ形式のみで人間味のないdogmaticなものを非常に嫌悪したと言われる。彼女がChristianityを否定したのもその dogmatic な点故であり，その根本精神であるLove and Pityには生涯変らぬ深い信仰を捧げている。しかし*Romola*には19世紀の一時期に於ける一つの観念としての実証主義的価値観がdogmaticに現われすぎていないだろうか。それに反してGwendolen plotではForgiveness of Sinが顕著で，一観念を超越した普遍の命をもつ愛の精神で貫かれており，その結果，時代を超えた傑作として感銘深い作品となっている。

George Eliotと実証主義的観念との結びつきは強く，最後迄その表現から免れることは出来なかったが，優れた知性をもつ彼女は時代の進展と共に徐々にその実体と限界を自覚していったのではないだろうか。三作の推移の軌跡には，実証主義の絶対を謳歌する理想主義的態度から過酷な現実の認識へのvisionの変化が感じられる。土台として明らかに実証主義的観念の上に立ちつつも，晩年にはその狭さを超越することによって，普遍的な力をもつ芸術へと近づくことにGeorge Eliotは成功している。

注

(1) M. Cowley (ed.), *Writers at Work,* 辻邦生訳 (新潮社, 1964), P. 13.

(2) 川本静子，宮崎孝一：「小説の世紀」(開拓社, 1969), P. 61.

(3) W. J. Harvey, *The Art of George Eliot* (London: Chatto & Windus, 1961), p. 177.

(4) George Eliot, *Romola* (London: Everyman's Library, 1968),

p. 420.

(5) Gordon S. Haight (ed.), *The George Eliot Letters* (London: Oxford University Press, 1956), vol. IV. pp. 103-4.

(6) George Eliot, *Daniel Deronda* (London: Everyman's Library, 1969), p. 5.

(7) Jerome Thale, *The Novels of George Eliot* (New York: Columbia University Press, 1959), p. 125.

(8) Minoru Toyoda, *Studies in the Mental Development of George Eliot* (Tokyo: Kenkyusha, 1931), p. 29.

(9) Henry James, "*Daniel Deronda:* A Conversation" George Eliot: The Critical Heritage, ed. David Carrol (London: Routledge & Kegan Paul, 1971), p. 431.

(10) Joan Bennett, *George Eliot, Her Mind and Her Art* (Cambridge: University Press, 1954), p. 148, quoting W. B. Yeats's *Idea of Good and Evil*.

(11) 川本静子：「イギリス教養小説の系譜」(研究社, 1973), p. 112.

(12) Calvin Bedient, *Architects of the Self* (Berkeley: University of California Press, 1972), p. 83.

(13) George Eliot, *Middlemarch* (London: Oxford University Press, 1963), p. xv.

(14) *Daniel Deronda,* p. 335.

(15) *Ibid.,* p. 606.

(16) "*Daniel Deronda:* A Conversation" p. 431.

(大学院学生)